



エルムハースト・バレエ・スクール公演での西原瑛里、渡邊英。Photo: Tim Cross

夏の風物詩

学年末を迎え、恒例の学校公演が各校で行われました。今月号では、その様子をマギー・フォイヤー、マイク・ディクソン、デボラ・ワイスがの三人がお伝えします。

エルムハースト・バレエ・スクールは、バーミンガム・ロイヤル・バレエ (BRB) に多くの団員を送り込む付属学校としての教育方針を、ますます強化しているようである。今年度は全学年の生徒が出演し、多岐にわたるカリキュラム内容を披露した。最初はジュニアの各学年によるバレエ風にアレンジされた『マズルカ』。様式とリズムに対する繊細な感覚を示す美しい踊りだった。だがこの日の白眉は、フレデリック・アシュトン振付の『レ・ランデヴー』だろう。マリオン・テイト以下BRBのダンサーたちが指導にあたったが、主役の西原瑛里の踊りが眼に快い。小柄で腕の動きにはニュアンスがあり、上体の使い方も流麗。ターンは歯切れがよく、魅力があふれる。相手役の渡邊英(たけし)も存在感がある。高いリフトやアシュトン独特の複雑なステップの一部には磨き残しがみられたものの、パートナーリングがすぐれていた。トリオの部分では、小林万利佳が、ショーン・メンダムとアリスティア・ピーティの男子二人とともに輝いていた。

マンチェスターのノーザン・バレエ・スクールの夏期公演では、デイヴィッド・ニーダム振付の『ウォリアーズ』が目を惹いた。ハチャトリアンを巧みに用い、アレキ・ダイトウ、リャン・ハマー、ルイス・メルロ、アシュリー・セルフ、リアム・スカリオンが卓越した能力を活かしたすぐれた小品である。男子のみ出演の本作は、『パキータ』短縮版とのバランスもよい。その『パキータ』では、エレナ・ツァミット、恒吉杏奈、鈴木渚、大川実久が女性ヴァリエーションを踊り、古典バレエの技巧を多彩に散りばめたステップを通して、高度な安定性やバランス、ジャンプ等や小気味よい積極性を見せてくれた。主役のパ・ド・ドゥを踊ったのは、小池愛理とダイトウ。それぞれ高速のフェッテ、カブリオールとすぐれたパートナーリングが印象的だった。

一方リーズにあるノーザン・バレエ・アカデミーの公演では、ヨーコ・イチノとカラ・オシーの指導によるオープニングに全学年の生徒が顔を揃えた。続く『眠れる森の美女』のプロローグと『ライモンダ』(ともに抜粋)に指導内容の充実ぶりが見て取れたが、とりわけアンドリュー・トムリンソンが目を惹いた。理想的なプロポーションと精確な技術、音楽性と存在感に恵まれた将来有望なダンサーである。デイヴィッド・ニクソン振付の『バッハ・ン・ボーイズ』ではさらに光っており、共演のティム・ダトソン、アレックス・ハリス、マーク・ロマネリ、ライス・トーマスもすぐれていた。短い中に出演する生徒たちの個々の資質を活かされており、本作は振付の面でも珠玉と呼ぶべき小品だった。

ロンドンでは、まずセントラル・スクール・オブ・バレエが高い水準を感じさせた。その中でも、舞踊技術と存在感が際立っていたのが、上野祐未である。『海賊』のパ・ド・トロワをやすやすと踊り、しかもその前向きな熱気は周囲をも巻き込まずにはおかない。難しい箇所でもみごとに自分をコントロールし、技術的にも全く緊張の走る場所がない。まさに眼福といえる魅力に富んでいた。

ロイヤル・バレエ・スクール (RBS) では、ジョン・ノイマイヤーの『オンダリング』が、生徒たちが持てる技術の全てを示し、感情を表現する格好の機会を提供した。音楽はフォスターの歌曲。「モリー、私を愛してるの?」はリリー・ハウズとダニエル・シリンガーディがコミカルな才能を發揮して素晴らしい成果を上げ、情熱的ですがすでに舞台を支配する術を知っているマルセリーノ・サンベや、マシュー・ボールとヨアキアン・ジャンの美しいペアは、「夢見る人」で率直で誠実な感情を表現した。1996年にハンブルク・バレエ・スクールのために作られた本作の上演は、RBS校長ゲイリー・ストックの確かな選択眼を示すものだった。

アラスティア・マリオットの『シンプル・シフォニー』は雰囲気異なる三つのデュエットが印象深い。第一は、アンナ・ローズ・オサリヴァンとサンベの瞬時の決めとシャープなラインが、スター・パフォーマンスと呼ぶに足るもの。第二は怒調の中にもユーモアを湛え、ジャンとエステバン・ヘルナンデスが高速で踊りきった。第三は抒情的かつ技巧的で、ボールの巧みなサポートと、スーザン・オパーマンのラインとプロポーションの美しさが際立った。(訳:長野由紀)